108　甲状腺イメージングにおける3D surface imageの臨床応用とその評価

石村順治、尾上公一、浜田一男、末廣美津子、
立花敬三、福地　稔(兵庫医大、核)

甲状腺イメージングにおける3D surface image(3DSI)の臨床的有用性を検討した。対象は甲状腺腫瘤病変を有する臨床例で従来のPlanar image(PI)と比較した。方法は$^{99m}TcO_4^-$(300MBq)静注投与30分後より512×512マトリクッスサイズのPIを撮像し、引き続いて、128×128マトリクッスサイズのSPECT dataを収集した。逆投影法で再構成したSPECT imagesよりDistance shaded methodで3-DSIを作成した。結果は、3DSIでは腫瘤部欠損の形状を立体的に視覚評価が可能であった。特にPIでは不明瞭であった腫瘤部欠損の位置関係、及び、その広がりの明確な把握が可能であった。以上の検討から3DSIは従来のPIに比べて臨床的有用性が高いとの結果を得た。

109　分化型甲状腺癌術後転移巣の検出における^{131}I診断量全身シンチグラフィ，^{201}Tl全身シンチグラフィおよび血清サイログロブリンの有用性

川崎幸子，余田みどり，細川敦之，高島　均，田邊正忠（香川医大放射線科）　宮内　昭（香川医大第２外科）

甲状腺癌術後症例59例115 回の ^{131}I 診断量（３～５mCi）（Iと略す），^{201}Tl全身シンチグラフィ（Tlと略す）と血清Tg（Tg）測定を施行した。男10，女49例，11～80才，乳頭癌51，濾胞癌８例であった。I治療量によるpre-ablation 50,post-ablation 50回でI，Tl，Tgの検出能を比較した。pre-ablationではI(+)Tl(+)Tg(+)14 %で，I(-)Tl(+)Tg(+)16 %，I(-)Tl(+)Tg(-) 4 %でTgの値いかんにかかわらずI(-)Tl(+)は20%であった。post-ablation ではI(+)Tl(+)Tg(+)30 %I(-)Tl(+)は24%であった。pre とpost studyを合わせI(+)42，Tl(+)44 %でTlはI より検出率は若干良好であった。

110　ＣＴ及び甲状腺シンチグラフィ（Na ^{123}I）による甲状腺腫瘍内ヨウ素の評価

今西好正，江原範重，下川光博，作山攜子，大橋健二郎，桑原雅子，伊藤隆志，石川　徹，辻野大二郎[*]
聖マリアンナ医科大学放射線医学教室，第３内科学教室[*]

甲状腺ＣＴと甲状腺シンチグラフィを使って甲状腺腫瘍内ヨウ素の評価を試みた。対象は術前に甲状腺ＣＴ及び甲状腺シンチグラフィを行った甲状腺腫瘍患者27例35腫瘍。甲状腺シンチグラフィでは静画像（24時間後）により腫瘍を cold，warm，hotの３型に分類した。ＣＴではＣＴ値と甲状腺内ヨウ素濃度とが比例することを利用して、腫瘍内ヨウ素分布で腫瘍を５型に分類した。この結果、腫瘍内にはほとんどヨウ素を含んでいない17腫瘍のうち16腫瘍は、ろ胞腺腫であり、甲状腺シンチグラフィのパターン分類とヨウ素濃度とは関連性がないようにみられた。これらの結果を文献的考察を加えて報告する。

111　新生児スクリーニングにより発見されたクレチン症の^{123}I甲状腺シンチグラフィの検討

木下俊文、丸岡　伸、坂本澄彦（東北大学放射線科）
中村　護（国立仙台病院放射線科）

新生児の血中TSHの測定によるクレチン症のマススクリーニングが施行されているが、宮城県では過去5年間に約8万人の新生児が受検し、そのうち当科にて^{123}I甲状腺シンチを施行したクレチン症は13例であった。初診時、TSH値は14-180μU/ml、平均85μU/ml と高値を示した。生後12-36ヶ月、平均17ヶ月にて^{123}I甲状腺シンチを施行した結果、甲状腺部にRIの集積が認められず、舌根もしくは舌下部に集積した、いわゆる異所性甲状腺腫が12例で、正常の甲状腺部にRIが集積し有機化障害と思われるものが1例あった。異所性甲状腺腫のRIの集積はほぼ均一で類円形を呈するものが殆どであったが、円形の集積像が2個並んだものも認められた。

112　ＩＭＸアナライザー（ＭＥＩＡ法）による高感度ＴＳＨの基礎的ならびに臨床的検討

森田新二[*]，玉井　一[**]，森川正道[*]，原　健[*]，
深田修司[*]，池田直子[*]，木村美智子[*]，隈　寛二[*]
隈病院[*]，九大医学部心療内科[**]

本法は、マイクロパーティクルに結合させたモノクロナール抗体と、Ｂ／Ｆ分離にグラスファイバーディスクを用いたＭＥＩＡ法で蛍光強度の変化率より血中ＴＳＨ濃度を測定する。反応及びデータ処理はＩＭＸ装置内で行われ、24検体が約 50分と短時間で測定結果が得られる。本法による健常人78名の血中ＴＳＨ値は0.40～3.80μIU／mlであり、未治療バセドウ病72名では全例測定感度（0.03μIU／ml）以下であった。甲状腺機能低下症では高値に分布した。ＩＲＭＡ法とは r＝ 0.986とよく相関した。本測定法は臨床的に有用との成績を得た。

113　ＴＳＡｂ，ＴＳＢＡｂ陰性のＴＳＨ受容体抗体（ＴＢＩＩ）の存在

玉井　一，森田哲也，松林　直（九州大学心療内科）
隈　寛二（隈病院）　長瀧重信（長崎大学第一内科）

バセドウ病患者の家族歴を有する甲状腺機能が正常の家族である353名についてTBIIをSmithのキットを用いて測定した。18名にTBIIの陽性を認め、そのうち、T3抑制試験で抑制された７名についてはその経過中にもバセドウ病を発症するに至らなかった。この７名について甲状腺刺激型抗体（TSAb)阻害型抗体(TSBAb)を経時的に測定したので、その臨床的、免疫学的特徴について報告する。［結果と結語］その後の観察で７名中３名はTBIIが陰性化し、 TSAbは新たに３例が陽性化し、TSBAbは２例が陽性化した。しかしながらeuthyroid状態を持続していた。従って実際に機能を有しないTBIIの存在の可能性が示唆された。

Presented by Medical*Online